

若き日の施存統

——中國共產黨創立期の「日本小組」を

論じてその建黨問題におよぶ——

石 川 禎 浩

はじめに

一 日本留學への道——杭州・北京・上海——

二 日本留學——日本小組・中共一大・強制歸國——
おわりに

はじめに

一九二二年一月六日、ひとりの中國青年が日本留學の志をまっとうせぬまま、大阪商船所屬「ありぞな丸」で門司を離れ、上海に歸っていった。ときおり甲板を逍遙しては、遠ざかりゆく日本の陸影を眺めるかれの名は施存統。いまや、埠頭からかれを見送るものは福岡縣警の警察官のみであった。⁽¹⁾なぜなら、かれは前年暮れに日本からの國外退去命令を受け、日本官憲の監視下に強制退去の途中にあったからである。船上の人となったかれの心中は、今となっては推し量るすべもない。國外退去命令によって、一年半ほどの留學生活に、意に沿わぬ終止符をうたれてしまったものの、すでに前年に第一回大會を開いた中國共產黨（以下、中共と略す）の紛れもない一員となっていたかれにしてみれば、こうした形で祖

國にもどることへの後ろめたさは、意外になかったかもしれない。なぜなら、かれを待つ上海の黨組織は、今や一人でも多くの活動家を必要としていたからである。

この施存統（一八九九—一九七〇）は、中華人民共和國建國期の民主諸黨派人士たる施復亮としてもその名を知られている人物であるが、中共黨史の上では、建黨期の有力メンバー、とりわけ周佛海とともに建黨期「日本小組」の成員として、または中國社會主義青年團の初期の指導者として史乘にその名をとどめている。⁽²⁾ 本稿は、上記の結末を迎えたかれの日本留學時期の軌跡を検討することによって、從來不明な點の多かった中共創立期のいわゆる「日本小組」の動向を解明し、あわせて中共建黨史のいくつかの未解明の問題をあきらかにすることを目的とする。

施存統は後年、黨史研究側の求めに應じて、中共創立過程とかれの日本留學にかんする回想を残している。それは、當時黨結成にかかわった他の人物の同種の回想とともに、中共建黨史の基本的資料となって今日に及んでいるが、以下にそれを摘録して當時のかれの動向の大まかな紹介に代えよう。

黨の上海小組は一九二〇年六月に結成されたが、最初から「共產黨」と呼んでいた。一九二〇年六月、陳獨秀、李漢俊、沈仲九、劉大白、陳公培（吳明、无名）、施存統、俞秀松らと戴季陶、沈玄廬らが陳獨秀の家で會合を開き、……二回目に、陳獨秀、俞秀松、李漢俊、施存統、陳公培の五人が會合を開いて共產黨成立の準備をし、陳獨秀を書記に選出した。あわせて、上述の五人で黨綱起草した。それからほどなく、陳公培が黨綱を一部筆寫してフランスに行き、わたしが一部筆寫して日本に行った。それは全部で十餘箇條であったが、内容はよく覚えていない。わたしは一九二〇年六月二〇日に東京へ向かい、周佛海と連絡をとって日本小組をつくったが、陳獨秀が手紙で、わたしをその責任者に指定してきた。一九二一年七月一日の第一回黨代表大會の時になっても、日本小組にはわずか二人、すなわちわたしと周佛海しかいなかった。われわれ二人はたがいに黨代表大會の代表になるよう推舉しあったが、結局、周が出席した（周が多年歸國していなかったため）。小組は最初はわずかに我々二人だけだったが、のちに十餘人に發展し

た。いま思い出せるところでは、彭湃、楊嗣震、林孔昭らの人がいた。小組のメンバーの多くは留學豫備生だった。二、三回小組の會を開いたことがあったが、會議の内容はもうよく覚えていない。一九二二年の暮れにコミンテルンがイルクーツクで大會を開いたが、第三インスターは日本に張太雷を派遣し、東京小組から代表を派遣して大會に参加するよう通知した。同年一二月、わたしは數名の日本共產黨員と一緒に逮捕された。當時、東京小組と日本共產黨とは組織上の連絡はなかったが、わたし個人は日本共產黨員の堺利彦、山川均らと連絡があった。一九二二年一月にわたしは歸國した。⁽⁴⁾

これが日本留學と「日本小組」の活動にかんする施存統の回想のほぼすべてであり、それはまた同時に、これまでかれの回想以外によるべき資料がほとんどなかった從來の「日本小組」にかんする記述のほぼすべてでもある。だが、中共の第一回全國代表大會（以下、一大と略す）にいたるまでの、ほぼ一年にわたる建黨活動に直接的、あるいは間接的に参畫している重要人物でありながら、日本留學時期のかれの事跡については、なお不明な點が多い。したがって、具體的資料によつてかれの事跡を掘り起こしていくことは、たんに「日本小組」の動向の解明のためのみならず、關係者の回想錄に大きく依據せざるを得なかった從來の中共建黨史そのものの補訂として、是非ともなされなければならない作業なのである。本稿は行論の順序として、まずかれの日本留學までの軌跡と、いわゆる「上海共產主義小組」の形成過程を概観したうえで、強制歸國處分に至るかれの日本での事跡を検證することとする。

一 日本留學への道——杭州・北京・上海——

若き施存統は自らの來歴を語ることに於いて相當に雄辯である。わけでも、一九二〇年に留學中のかれが發表した「十二年來のわたしを振り返る」⁽⁵⁾は、この時期に書かれた青年の自己分析として、同時代のそれらの中でも白眉のものである。まず、主によりながら日本留學までのかれの歩みを見ておこう。

施存統（のちに復亮と改名、變名は方國昌、筆名は光亮、亮、文亮、伏量、C T、施陶父等）は一八九九年、浙江省金華縣葉村（現金華市）に、父施長春、母徐氏の長子として生まれた。父施長春は五畝の田畑を有していたが、このほかに小作をしながら農業のあいまには米の運送に従事するいわゆる兼業農民であった。母徐氏は書香の家の出で、字の読み書きができたという。一〇歳で私塾に、一二歳で初等小學堂に學んだかれは、學堂の教師に再三「同寢」を強要されたり、あるいは教科書ではなく『論語』『孟子』をもちいる授業を受けたりと、いわば草創期ならではの學堂教育をうけた。その後、若干の紆餘曲折を経たのち、長山高等小學堂を卒業したかれは、一九一七年に杭州の浙江省立第一師範學校（以下、浙江一師と略す）に進むことになる。

當時の浙江一師は、もとより浙江省の最高學府であっただけでなく、「與世俱進」（時代と歩調をとる）という方針を掲げる校長經亨頤の下、革新的な學校運営で知られていた。なかでもその國文科は、劉大白、陳望道、夏丏尊、李次九らいわゆる「四大金剛」と稱された新派の教員の影響のもとに、文語文を廢して口語文を教授するなど、新文化運動の精神をいちはやく教育現場にもちこみ、浙江省の教育廳查察報告において、「學に本原なく一知半解……思想中毒の弊有るを免れず。……勢い必ずや全校の學生をして魔障に墮せしめん⁽⁶⁾」とこき下ろされる半面、學生たちには新鮮な驚きと共感をもって迎えられたように、新文化運動の實驗場ともいふべき觀を呈していた。施存統もそうした學生の一人として、とりわけ夏丏尊の影響を強くうけたと語っている。また、かれがその後なく、知友あるいは盟友とすることになる俞秀松、傅彬然、周伯棣らと交わりを結んだのも、この浙江一師在學中のことであった。

一九一九年、北京で五四學生運動がおこると、施存統は諸手をあげてそれを歓迎した。杭州の五四時期におけるかれの活動については、『新青年』『星期評論』等の取り次ぎをした「書報販賣部」の設立をはじめとして、紹介すべき事績がいくつあるが、細事にわたるのでいまは省略にしたがう。だが、浙江一師時期のかれに關して、特筆しなければならぬのは何といっても、浙江一師學生施存統の名を一躍全國にとどろかせた「非孝」事件⁽⁷⁾である。

五四時期の反儒教精神高揚の最大の事件のひとつである「非孝」事件とは、杭州の進歩派學生の雜誌である『浙江新潮』第二號（一九一九年一月）に、孝道の非を痛撃する施存統の「非孝」が掲載されたことよって巻き起こされた筆禍事件である。残念ながら『浙江新潮』該號は、中國においても發見されておらず、原文を参照することはできないが、かれの言によれば、「非孝」は二つの觸發、すなわち「事實の刺激」（病に臥していた母が封建的因習のために、父の非人間的な扱いを受けたことにたいする痛憤）と「思想の啓發」（『進化』『民聲』『實社自由錄』等を通じて得られたアナキズム）をうけて書かれたものであるという。これよりさき、浙江一師入學の年に『新青年』所載の陳獨秀の反孔教論を目にし、當初「刻薄の文人」としてかれを唾棄しながら、ほどなくそれを再讀して『新青年』の「半信徒」となり、一九一九年後半には「全面的に贊同」するに至ったとして、かれは五四青年としての自己の歩みを語っているが、こうした思想的遍歴をたどり、かつ封建的因習に縛られた家庭における母の哀れな末路を實見したかれに、當時流行のアナキズムが大いなる魅力をもつて受け入れられたであろうことは容易に想像される。

はたして、『浙江新潮』に掲載されたかれの「非孝」は、つとに經亨頤や浙江一師の教育方針に快からぬ感情をいだいていた浙江省當局をはじめとする守舊派にとって、格好の攻撃材料となった。學校内外から「非孝」を大逆不道の文章とする聲があがったのはもちろんのこと、事件はさらにその「煽惑」をゆるした經亨頤の去就をめぐる新舊兩派の對立へと發展し、翌年のいわゆる「浙江一師風潮」⁽⁸⁾にまで擴大したのであった。北京政府は一二月二日に同誌の發禁令をくだし、⁽⁹⁾ ついに『浙江新潮』は第三號で停刊のやむなきに至る。かくて杭州に身の置き所なくなった施存統は、翌年の元日に同志たる俞秀松、傅彬然、周伯棟らと北京へ旅立った。⁽¹⁰⁾ 北京には、施存統が尊敬してやまなかった陳獨秀（陳は「非孝」に關して一文を草し、『浙江新潮』の議論はさらに徹底しており、「非孝」……の文章は天真爛漫、きわめて愛すべきである」と賞賛していた）⁽¹¹⁾ がおり、時にかれの發起にかかる北京工讀互助團が呱呱の聲をあげようとしていたのである。施存統らの上京の目的はほかでもなく、「能力に應じて働き、必要に應じて取る（各盡所能、各取所需）」の理想を掲げていたこの工讀互助

團運動に身を投じることにあつた。『新青年』『星期評論』といった當時の進歩的青年の愛讀誌によって、浙江「非孝」事件の驍將として紹介されたかれらの互助團への参加は、大きな社會的關心をあつめたという。

施存統らは一月一〇日に勇躍して北京工讀互助團第一組に合流した⁽¹²⁾が、かれらの志とは裏腹に、新社會のモデルたるべく出發した北京工讀互助團第一組は、開始早々に團員相互の摩擦から活動の停滯をきたし、經濟的破綻もあつてその後二箇月ほどで解體してしまふ。そもその團員間の感情齟齬の原因は、第一組への闖入者易群仙⁽¹³⁾（國會議員易夢龍〔易宗夔？〕の娘）をめぐる團員間の戀愛問題のトラブルであつたようだが、その一方の當事者なりとして指彈された施存統の失望は大きかつた。三月二三日、北京工讀互助團第一組は事實上の解散を決定する⁽¹⁴⁾。陳獨秀はこの時、すでに北京をひきはらつており、互助團の發起人であつた李大釗や胡適は、團の解散に先だち、團員たちの行く先を案じて、北京大學關係の印刷所の植字工や圖書館の事務職員といった仕事を斡旋しようとしたが、施存統と俞秀松はそれを斷り、北京を離れることにした⁽¹⁵⁾。團の殘務整理を濟ませた施存統が俞秀松とともに上海へ向けて出立するのは三月二六日、上海到着はその翌日であつた⁽¹⁶⁾。

上海に向かうにあたり、當初、かれらは福建省漳州に行き、「社會主義將軍」の呼び聲高かつた陳炯明の幕下に參じる心づもりであつたという。だが、上海到着のその日に身を寄せた星期評論社での出會いがかれらの人生を大きく變えることになるうとは、恐らくかれら二人は豫想していなかつただろう。

施存統らが上海で、眞っ先に星期評論社をたよつたのは當然であつた。そこには「浙江の二沈⁽¹⁷⁾、すなわち戴季陶と共に浙江一師の革新的教育方針に共鳴し、『星期評論』誌上で「非孝」への支持を表明した沈玄慮⁽¹⁷⁾と、杭州において四面楚歌の境遇にあつた施存統の數少ない理解者であつた沈仲九（「非孝」事件當時、浙江省教育廳の雜誌『教育潮』の主編⁽¹⁸⁾）がいたからである。附言すれば、この前後の星期評論社には、杭州を追われた「四大金剛」のうち、陳望道と劉大白も身を寄せており、浙江一師の革新派のかけ込み寺といった趣さえあつた。當時の星期評論社にはかれらのほか、李漢俊、邵力子をは

じめ、沈玄廬の四夫人からその子沈劍龍とその妻楊之華らが出入りし、さらには『星期評論』の聲望を慕って家を飛び出してきた青年男女がひきもきらぬ一種の解放の場であった。⁽¹⁹⁾ 上海に着いたばかりの俞秀松は、知人への手紙のなかで、そうした星期評論社の雰圍氣を、「この同志は老若男女あわせて十四人、その主張はみなきわめて徹底しており、わたしなど實にものの數にもはいりません。しかし、友愛、歡喜、天眞の空氣はわたしの周りに滿ちあふれており、人間たることのすばらしさを眞に感じます」と傳えているが、それは施存統の氣持ちでもあっただろう。⁽²⁰⁾

さて、この星期評論社で、陳炯明の下に投じたいという意嚮をうちあげた施存統らに對して、相談をうけた沈玄廬と戴季陶の答えは、「軍隊に身を投ずるは、工場に身を投ずるに如かず」というものだった。かれらの上海行以前、奇しくも北京工讀互助團が解散を決めた日に、「工讀互助團と資本家の生産制」⁽²¹⁾を執筆して、工讀互助團運動そのものの限界を資本主義社會の矛盾から指摘し、「資本家生産制下の工場に投じよ！」と疾呼していた戴季陶は、かれらにその論を再度語ったことだろう。その説得を受け入れた二人は漳州行きをやめ、星期評論社にしばらく身を寄せるかたわら、資本主義社會の象徴ともいえる工場労働者の道を選ぶことを決意する。そのための適當な工場探しに奔走してくれたのは、そのアドバイスをした當の戴季陶自身であった。⁽²²⁾ こうして、二人のうち俞秀松は、四月に虹口にある厚生鐵廠の労働者となった。⁽²³⁾ 一方、施存統は四月に『工讀互助團』の實驗と教訓⁽²⁴⁾を執筆し、工讀互助團運動にかねなりの總括を加えて、戴季陶の「資本家生産制下の工場に投じよ！」という言葉に全面的に賛意を表したものの、おりからの肺病ゆえに、工場行きのほうは暫時あきらめざるを得なかった。その言うところに従えば、六月に日本に發つまで、かれは星期評論社の「事務補助員」をしたという。⁽²⁵⁾

以上が日本留學に至るまでの上海における施存統の足どりであるが、じつはかれの上海逗留時期には、星期評論社や陳獨秀の『新青年』同人の周邊において、中共發足にむけての動きが進行していた。施存統も深く関わったその建黨活動を以下に瞥見しておこう。

中國における共產主義組織結成への模索に關しては、一九二〇年二月に陳獨秀が李大釗の庇護のもとに密かに北京を離れて天津へむかった時に、黨の結成を話し合ったとするいわゆる「南陳北李、相約建黨」⁽²⁶⁾説や、同時期にアナキスト黃凌霜らと陳、李が「社會主義者同盟」なる組織を作ったという説⁽²⁷⁾があるが、その根據はいずれも斷片的な回想であり、目下のところそれを裏附ける具體的資料に缺けている。中國における共產主義組織結成は、やはりロシア共產黨（ボ）極東ビュローの派遣により、一九二〇年春に中國へやってきたヴォイチンスキー（G. Voitinsky）一行の働きかけに、その端緒を求めなければなるまい。

一九二〇年三月（一説に四月）に北京にはいったヴォイチンスキー一行は、李大釗や李の影響下にあった學生たちと會見し、四月末には李の紹介狀を持って上海を訪れ、陳獨秀、李漢俊、戴季陶らを中心とする上海の社會主義者たちと接觸した。これを機に、後年「上海共產主義小組」と呼ばれることになる組織が形成され、共產黨結成に向けての活動を展開していくことは、その「上海小組」の當時の名稱に異同はあるものの、關係者の回想の多くに共通しており、大筋として間違いないまい。ただし、その「上海小組」の名稱とその性質、あるいはその成立日時に關しては、回想によってかなりの相違があるので、その點だけは検討しておく必要があろう。

「上海小組」に關するもつとも詳細な研究である『上海共產主義小組』（陳紹康編著、知識出版社、一九八八年）は、陳望道、邵力子、李達⁽²⁹⁾の回想によって、一九二〇年五月に組織された「馬克思主義研究會」が同小組の雛形であり、ヴォイチンスキーの援助の下、七月から八月にかけて同研究會の基礎の上に、「共產黨」または「社會黨」を名乗り、比較的整った黨綱の如きものを持つ「上海小組」が結成されたとしている（同書九—一〇頁）。だが、「馬克思主義研究會」の存在を裏附けるものは、邵力子と陳望道の回想のみであり、同會の存在については、近年疑義をはさむむきもある⁽³⁰⁾。さらに、七、八月につくられたとされるいわゆる「上海小組」に至っては、種々の回想の間に隔たりが大きく、回想のみからその實態を解明することは相當に困難である⁽³¹⁾。

ところが、こうした建黨活動にかかわったと見られる俞秀松の當時の日記が近年発見された。⁽³²⁾そこにはこの定説をくつがえす記述がある。俞秀松日記一九二〇年七月一〇日の條にいう。「さきに我々が組織したところの社會共產黨を経てのち、アナキズムとボルシェヴィズムにたいして、ともにさっぱり手がかりがつかめない。以前にアナキズムを信じたのは、確かに盲従であつた……」⁽³³⁾。俞秀松が「上海小組」以外の黨派組織活動には關與していないことから見て、いわゆる「上海小組」は七月以前に、「社會共產黨」という名稱で存在していたことが明かになるのである。ではそれが組織されたのは何時か。現存する俞秀松日記は一九二〇年六月一七日深夜の記述から始まり、七月二五日で終わっているが、七月一日の條以前には「社會共產黨」への言及がまったくなく、日記を追う限りでは、それが六月一七日以前に組織されたことが推測されるのみである。

この「社會共產黨」の結成日時とその性質を検討するうえで、興味深いのは施存統のこの時期の足どりとかれの回想、およびそれと符合する陳公培の回想である。⁽³⁴⁾施存統の回想によれば、一九二〇年の六月に二回の會合が開かれ、戴季陶が脱退したあとの二回目の會合で、陳獨秀、俞秀松、李漢俊、陳公培、施存統の五人によって共產黨（施存統は「上海小組」は當初より「共產黨」と呼んでいた、としている）成立の準備をし、黨綱を起草したという。これと符合するのが、上述のメンバーに含まれている陳公培の回想である。從來あまり注意されてこなかったかれの回想は、施存統のそれと細部において若干の差異があるものの、自身と施存統、俞秀松らの参加した中共組織の準備會において、やはり五、六條の簡単な黨の章程が作られたことを述べている。陳公培は、その會合が開かれたのは「一九二〇年夏」としているが、同時に會合のあった「その晩に施存統が日本に行った……、李漢俊と戴季陶が施を宮崎寅藏〔すなわち宮崎滔天——引用者註〕の息子宮崎龍介に紹介した」とも回想している。施存統の日本留學は、後述するように、確かに戴季陶と宮崎親子の斡旋によって實現したものであり、この點においてかれの回想の信憑性は相當に高いといえるだろう。

では施存統が日本に出生したのは何時か。陳公培の回想に従えば、施存統の上海出發の日こそが「社會共產黨」とい

う、まがりなりにも綱領をもつ實質的な黨組織の結成の日ということになるが、ことはそう簡単ではない。施存統は、一九二〇年六月二〇日に上海を發つた、と述べているが、これは若干の補足説明を要しよう。すなわち、六月二〇日は船の出航の日であつて、⁽³⁶⁾かれが俞秀松をはじめとする星期評論社の同人たちに見送られて乗船したのは、その前日すなわち一九日の夜だからである。だが、そのことを記す俞秀松日記の當日の條には、かれも出席したはずの「社會共產黨」發起の會合のことはまったく記されていない。したがつて、施存統の乗船の日がすなわちその會合の日であるとする陳公培の言は訂正されなければならないが、その會合が施の上海出立の日とそう隔たつてはいないということは推定し得る。その根據は、施存統の留學激勵會とおぼしき壯行宴が六月一六日に開かれてゐること⁽³⁷⁾（陳公培がこうした壯行の會をもつて施存統の日本への出發と見なした可能性はあろう）と、當初「社會共產黨」設立のための會合に關與してゐた戴季陶が、精神衰弱の療養のために上海から湖州に發つたのが六月一七日前後であり、その精神衰弱の原因のひとつは、ほかならぬその「共產黨」への参加をめぐる煩悶にあつたといわれていることである。⁽³⁸⁾

以上のことを總合すれば、中共一大に先立つことはば一年、陳獨秀、李漢俊、施存統、俞秀松らを中心として、通説にいう一九二〇年七、八月よりも早く、六月の中旬には「社會共產黨」として認識される事實上の黨組織が上海で結成されてゐたこと、そしてこの「社會共產黨」こそが、黨史上の「上海小組」であつたことが確認できるだろう。むろんこの「社會共產黨」なる組織は、いふなれば簡單な綱領の如きものを持つだけの初歩的組織にすぎなかつた。だが、この「黨」はそれ以降、かれらのほかに、以前の「馬克思主義研究會」と稱される會のメンバーであつたという陳望道⁽⁴⁰⁾、邵力子、沈玄廬⁽⁴¹⁾らや、さらには、李達（八月に日本より上海に歸國）、⁽⁴²⁾周佛海（一九二〇年夏に日本留學から一時歸國）、沈雁冰ら新黨員を加え、何回か黨綱領、黨規約の素案を検討しながら、「共產黨」の名の下にマルクス主義の宣傳、あるいは勞働運動へと取り組んでいくことになるのである。その意味では、「社會共產黨」の結成にあづかつてまもなく日本へ向かつた施存統は、まぎれもなく草創期よりの「共產黨」員であつたといつてよいだろう。

二 日本留學——日本小組・中共一大・強制歸國——

上海において、施存統にもっとも大きな影響を与えたのは、當時の上海において、李漢俊とならぶマルクス主義研究を誇っていた戴季陶であり、施存統に留學を勧めたのもかれであった。おりから、施存統が身を寄せていた『星期評論』は、一九二〇年六月六日をもって停刊に至っており、その社員たちがその後の身の振り方を模索していた時のことであった。星期評論社の解散以後、そこにたむろした同人たちは櫛の齒が缺けるように、白爾路三益里の社屋から去っていったが、かれらの間には、施存統以外にも、出洋、留學の考えを抱くものが少なくなかったようである。⁽⁴³⁾

それら若き同人のなかでも、「近來の思想はほほ何もかもかれの影響をうけた」とみずから告白するほど戴季陶に傾倒していた施存統を、戴がとりわけ可愛がり、その後のかれの身の振り方を案じたのは當然であつただろう。當時、堺利彦、山川均らのマルクス主義研究を高く評價し⁽⁴⁵⁾、かつ高知、青森、京都といった地の自然環境を愛していた戴季陶が、留學と療養の地として施存統に勧めたのは日本であつた。むろん、日本にはかれの多年の同志でもある宮崎滔天とその子宮崎龍介がおり、留學を斡旋するのに不都合はなかつたはずである。かくて戴季陶は、その前年の秋に中國を訪れたさいに親しくかれのもとを訪問していた宮崎龍介に、施存統の留學受け入れを依頼したのであつた。⁽⁴⁷⁾

六月一九日夜、施存統は友人たちの送別をうけて船上の人となる。すでに上海を離れていた戴季陶の姿は見送りの人々の中にはなかつたと見られるが、俞秀松ら舊星期評論社の同人たちがかれを見送ってくれた。實はその同人たちはその一兩日來、沈玄廬と沈仲九の亂闘騒ぎとそれに引き續く沈仲九の失踪という事件にふりまわされていたために、内心かれを歡送するどころではなかつたのであるが、「無心」に歡送された施存統は恐らくそれを知らぬまま、かれらに別れを告げたはずである。⁽⁴⁸⁾

かれが留學の世話をしてくれることになつていた東京の宮崎親子（當時、北豐島郡高田村三六二六番地在住）のもとに現れ

たのは六月二六日であった。宮崎龍介の當日の書簡にみえる「支那から來た少々肺の加減の悪い友人」⁽⁴⁹⁾こそ施存統にはかならない。日本に身寄りのないかれは、おそらく東京到着と同時に宮崎宅を訪れたにちがいない。同書簡には、施存統が早速その日に、宮崎龍介に伴われて病院へ行つたことも記されており、かれの肺の加減は相當に悪かったと推測される。

宮崎滔天の長男にして、東京帝大新人會の發起人の一人として知られる當時の宮崎龍介は、その年の三月、内紛から新人會を除名されてはいたものの、雑誌『解放』の編集に參畫したり、大學卒業を閑近にひかえつつも、五月に北京大學から教授、學生の訪日團が來ればその受け入れに奔走するなど、相變わらずの活動家であつた。おりから宮崎は、かつて黃興が所有していた高田村の大邸宅の管理を任されており、それを新人會會員の共同生活の場に提供していた⁽⁵²⁾（その晚會以降も種々の人間が居候していたらしい）くらいであるから、下宿先が決まるまでの間は、施存統もそこに假住まいしたのではなからうか。かれが宮崎宅からほど近い高田村一五五六番地の三崎館に下宿を始めたのは七月ごろであつた。⁽⁵³⁾

日本において、經濟學を學ぶ決意をしていたかれではあつたが、當然のようにまず習得せねばならなかつたのは、まったく不自由な日本語であつた。留學に先だつて、日本語の達人である戴季陶に、日本語は「二年勉強すればまあ自由に操れるようになるうが、本當に自由に使いこなすためには三、四年やらなければならぬ⁽⁵⁵⁾」と諭されていたかれは、目の東京同文書院に籍をおく（一九二二年のはじめに退學⁽⁵⁶⁾）かたわら、最初の三、四箇月をもっぱら日本語の專修にあてたらしい。⁽⁵⁷⁾その日本語會話の方は結局、「相當修學ノ餘地アリ⁽⁵⁸⁾」という水準に止まつたと見られるが、日本書の讀解の方は奮闘の甲斐あつて、その年の暮れには何とか長編の翻譯を『民國日報』に寄稿し、「存統は半年日本語をやつて、もう本の翻譯ができるようになった⁽⁵⁹⁾」と賞賛されるまでにこぎ着けている。

當時の施存統は、すでに上海において、戴季陶の影響のもとにマルクス主義への確信を深めつつあつたと考えられる。⁽⁶⁰⁾だが、日本留學當初のかれの思想的立場は、「とはいえ、かれ〔戴季陶——引用者註〕の抱く主義にたいして、なお絶對的に信じているわけではない。すなわち、わたしがこれまで信じてきた「安那其」主義^{アナキズム}も、それが一個の合理的な理想であ

るということは認めている⁽⁶¹⁾」と自ら述べるように、アナキズムとマルクス主義とが（かれにとってはほぼ矛盾なく）混在したものであった。かれが留學當初、中國のアナキストと連絡を保っていたことは、まさにそれを證明しているよう。そしてはからずも、その中國アナキズム運動との接觸によって、かれの存在と舉動は、日本警察の監視網の探知するところとなってしまう。監視廳が施存統を警戒するに至った發端は、當時上海で梅景九らが出していたアナキズム雜誌『自由』第一號（一九二〇年二月）に、日本通信所として「東京府高田村一五五六、三崎館存統」の名が掲載されたことによるものだった。日中間の「無政府共產主義者」の暗躍を警戒していた監視廳外事課が「宮崎滔天方ニ出入シ猶支那新聞雜誌ヲ講讀シ居ルモノ」として、施存統を突き止めたのは翌年一月、この時、監視廳側はすでにかれが「極端ナル儒教排斥忠孝否認論」である「非孝」の作者たることを探知していた⁽⁶²⁾。以後、その強制歸國に至るまで、かれの行動は日本警察の厳しい監視下に置かれることになる。

アナキズムの立場から「非孝」を發表したかれの名は、中國において相當に鳴り響いていたらしく、施存統は上記『自由』以外に、一月一四日にも安徽省の蕪湖第五中學の學生たちが組織したアナキズム結社「安社」の趣意書を受け取り、アナキズム關係の書籍を紹介するよう求められている⁽⁶³⁾。こうしたアナキズム運動にたいして、かれが具體的にいかなる對應をしたかはよくわからない。だが、その一月に「自由組織、自由聯絡」や「能力に應じて働き、必要に應じて取る」といったことは、もちろん我々が到達せねばならぬ理想ではあるう。だが、……現社會から一足跳びにその理想へ到達するという理由を、我々はやはり見いだすことができない。その間には當然に一種の過渡的機關⁽⁶⁴⁾がなければならぬ」として、マルクス主義の不徹底やボルシェヴィキの專制をなじるアナキスト連をたしなめていたこの時期のかれは、「安社」の掲げる「アナキズムの眞理」なるものに、諸手をあげて賛意を表することはできなかったのではなからうか。施存統自身のアナキズムとマルクス主義にたいする思想的立場は別に論じなければならぬが、マルクス主義研究よりも、むしろアナキズム運動に警戒の目を光らせていたはずの警察側の一月以降の報告に、かれと中國アナキズム運動の關係を示す

記述がないのは事實である。そして、四月以降の警察側報告にあらわれる施存統は、すでにアナキストとしてのかれではなく、「共產黨」を結成せんとしていた陳獨秀、李達ら、いわゆる「上海小組」と連絡をとりあう「要注意支那人」としてのかれであった。

一九二一年四月二三日の警察側の報告によれば、施存統はこのころ、「我國社會主義者界利彦、高津正道、山崎今朝彌等ト交通シ彼等ノ著述ニ係ル全主義宣傳雜誌其ノ他ノ印刷物等ヲ翻譯ノ上支那内地人ニ紹介」してしているとされ、さらに「在上海鶴某ナル全主義者ト共ニ我社會主義者ト相謀リ之カ宣傳方法ヲ講スヘク近ク上海ニ於テ秘密會ヲ開催スル疑ヒアリ而シテ前記鶴ヨリ全人ニ送レル近信ニ依レハ日本社會主義者ト目下秘密出版物ヲ發行スヘク準備中ナル趣ニシテ該出版物ノ送附方申越セシ事實アル」と指摘されている。かれがこの時期に堺らと接觸していたことは、かれ自身ものちに證言しており、疑問の餘地のないところである。「彼等ノ著述……ヲ翻譯ノ上支那内地人ニ紹介」しているとは、『民國日報』「覺悟」に隨時發表した「現代文明底經濟的基礎」（『覺悟』二月二三、二四日 原著は山川均「現代文明の經濟的基礎」〔山川』社會主義者の社會觀』一九一九年 所收）、『考茨基底勞農政治反對論』（『覺悟』四月二三〜二九日 原著は山川均「カウツキ一の勞農政治反對論」『社會主義研究』三卷二號、一九二二年三月）等を指すものだろう。

しかし、この報告で興味深いのは、何と言つても、かれが「鶴某」すなわち李達や日本の社會主義者らと謀つて、社會主義宣傳のための秘密會を上海で開催せんとしたという部分である。この「秘密會」を、この年七月に開催されることになる中共一大と考えることにはやや無理がある。この時期にそうした「秘密會」が計畫されたとすれば、時期的に見ても、それは同年の五月に日本、朝鮮、中國の共產主義者を集めて、コミンテルンとの連絡や資金授受のために上海で開かれた會合のことであろう。すなわち、從來の研究において、この年の春に朝鮮人李增林（あるいは林某）がその連絡員として來日し、これをうけて四月末に發足した「日本共產黨暫定執行委員會」から近藤榮藏が派遣されたという上海のコミンテルン極東ビューローの會合⁽⁶⁶⁾ではないかと推定されるのである。我國の日本共產黨史の研究においては、近藤の派遣にあたつ

て李増林以外からの働きかけは確認されておらず、また近藤の供述および回想によっても、かれが上海で接觸したのは李東輝、朴鎮淳らいわゆる高麗共産黨上海派や、中國人でいえば黄介民、姚作賓ら當時「上海小組」とは別に「共産黨」あるいは「大同黨」をかたっていた面々であつて、「上海小組」の「中國共産黨」ではなかった。おそらく、コミンテルン第二回大會直後の執行委員會の極東代表であり、ヴォイチンスキー歸國（一九二二年春）後の上海にあつて、實質上のコミンテルンの代表を自任して、高麗共産黨を結成するかたわら、黄介民や姚作賓らとも中國の共産主義運動の組織にあたつたという朴鎮淳⁽⁶⁹⁾らは、李増林以外のチャンネル（すなわち「上海小組」）「これも朝鮮人共産主義者と交渉があつたと見られる」――施存統のライン）でも日本側に接觸しようと試みたのではなからうか。⁽⁷⁰⁾

このように、四月以降、施存統の周邊には、上海からの國際共産主義運動の波が及んできたようであるが、その一方、「上海小組」を核とする建黨活動もこの頃から本格化し、施存統と周佛海の二名からなる「日本小組」も、その建黨活動に加わっていくことになる。四月下旬、鹿兒島にいた周は施存統に二通の書簡を送り（それぞれ四月一日、四月二八日の消印）、廣州の陳獨秀からの來信の意を傳えている。その四月一九日の來信にいう。

昨日獨秀ノ來信ニ接ス曰ク上海、湖北、北京各處ノ全志ト協商ス我等兩人ヲ駐日代表トナシ日本全志ト連絡セシメントス日人ノ間ニハ我等ノ間ニ此ノ團體アルヲ知ラサル者多シ我等ハ正ニ盡力セサルヘカラス但我ニハ二個ノ困難アリ

(一) 我ハ明年鹿兒島ヲ去ル此ノ一年間此ノ偏僻ノ地方ニ居住シテハ何事モ出來ナイ

(二) 我大學ノ志願ハ京都ニ在リ然シ日人ト連絡スルニハ矢張り不便ナリ以上二個ノ困難アリ我ハ代表ノ虛名ヲ擁シ實ニ慚愧ニ堪ヘス之ヲ獨秀ニ轉告ヲ請フ君ハ東京ニ居ルカラ非常ニ便利テアル⁽⁷¹⁾

これにより、「駐日代表」すなわち施存統と周佛海からなるいわゆる「日本小組」は、陳獨秀の發意をうけて、四月下旬に形成されたことができる。この書簡からも明らかのように、いわゆる「日本小組」とは、「日本全志ト連絡」することがその目的であつて、その實質上の實務を擔當したのは鹿兒島にいた周ではなく、東京の施存統であつたと見ら

れる。ただし、施存統が回想にいう、彭湃、楊嗣震、林孔昭ら十餘人に發展し、二、三回の會合を開いたというその後の「日本小組」の活動の實態については、官憲側の報告には該當するものが見當たら⁽⁷²⁾ない。

中國の共產主義組織と連携して、日本の「同志」に働きかけをせんとしていた施存統らの動向をつかんだ日本の警察側が、かれに一層の警戒を拂ったことはいうまでもない。五月八日にかれが上海の邵力子にあてた書簡（これも警察側によって開封されている）には、「僕へ近來毎日日本警察ニ騷擾セラル眞ニ惡ムベシ⁽⁷³⁾」という言葉がみえ、當時のかれが厳しい監視下に置かれていたことが知れる。かくして、六月一七日に至り、かれは警視廳外事課課員の來訪と尋問をうけることになる。かれはそれへの應答のなかで、「戴天仇」「すなわち戴季陶——引用者註」ヨリ宮崎氏ニ紹介サレ全人ノ盡力ニヨリ目下ノ宿所ニ止宿スルヲ得タ」こと、「目下午前中ハ專心英語ノ獨習ヲ爲シ午後ハ日本語及經濟書等ヲ研究シツツアリ而シテ準備ナラハ慶應大學ニ入學シ經濟學ヲ學フ意嚮」であることを語り、同時に「渡來後毎月平均約一百圓ノ學費ヲ自宅ヨリ受ケ居レ」るが、その實際の送金は戴季陶の手を経てうけとっていることを告げている⁽⁷⁴⁾。ただし、決して豊かではなかったかれの家が、はたして「非孝」の息子に月に百圓もの仕送りをしていたかは、大いに疑問であつて、實際は、のちに宮崎滔天が警察側に語つたように、「友人戴天仇……ハ施存統ノ頭腦明晰ナルヨリ將來ニ望ヲ屬シ本邦ニ留學セシメ毎月五十圓内外ノ學費ヲ給シ⁽⁷⁵⁾」ていたというのが眞實であらう。おそらくかれは、上海における大物社會主義者として知られていた戴季陶から資助をうけているということが、警察側の警戒感をさらにつのらせると考え、明言しなかつたのではあるまいか。

このほかにもかれは、「當地日本人中ニテハ宮崎龍介以外一人ノ交友ナシ……日本社會主義者トハ交通セシコト一回モナシ」、あるいは「胡適」先生……ハ余ノ尤モ崇拜スル一人ナリ「陳獨秀」カ言論思想ヲ發表シツツアリタル際余ハ全人ノ說ニ感服シツツアリシカ今ヤ廣東政府ノ官吏ト爲リ……最早思想界ノ人ニアラス」「社會主義ヲ研究スト雖モ余ハ社會主義者ニアラス從テ主義ノ宣傳等モ亦爲シタル事ナシ⁽⁷⁶⁾」というように、社會主義人士との交友をつとめて否定している

が、それも同様の自制にかかるものであろう。ただし、すでに施存統と堺ら日本社會主義者、および陳獨秀らの中國共產主義組織との接觸の事實をつかんでいた警察側が、この言葉を額面通りにうけとったとは考えられない。施存統の「最近警察ハ余ニ追尾シ余ノ一舉一動ヲ束縛スルコト甚タシ奇怪ニ堪ヘス」という抗議にもかかわらず、かれに對する監視の目はそれ以後も緩むことはなく、逆に「宿主ヨリハ轉宿方ヲ要請サルル等甚タ困窮シ居レリ」という狀況に置かれることになったのだった。

かれが警視廳外事課課員の尋問をうけた一九二一年六月は、ちょうど李達、李漢俊が、同月三日に上海に到着したマリーリン(Marling あるいは H. Sneevliet)の督促をうけて、中共一大の開催準備にとりかかっていた時期にあたる。當初、中共

一大は六月二〇日に開催すべく豫定されていたらしい(78)(實際に開催されたのは七月三日)が、近くその會合が開かれるとい

う情報、日本の警視廳側も把握していた。警視廳がつかんだその情報(79)は、開催豫定日こそ六月三〇日としているものの、開催場所を「貝勒路」すなわち現在の中共一大會址のある「黃陂南路」と報告しており、あながち虚報ともいえないものである。もっとも、該報告はその情報の來源については觸れておらず、ただちにそれが施存統ら「日本小組」と上海との連絡のやりとりを竊取して得られたものであると斷定することはできない。だが、「日本小組」が周佛海を一大への代表として派遣するにあたって、事前に上海からの大會開催の通知と、それをうけた施と周との書信の連絡があったことはまちがいないし、またこの時期の施存統の收發する郵便は、ほぼ警察側によって檢閲されていたことからしても、そうした情報が施存統周邊から漏れたことは充分に推測しうる。いずれにせよ、七月末に開かれた中共一大に周佛海を派遣したことによって、「日本小組」の實質上の責任者だった施存統は、名實ともに「中國共產黨」の黨員となったのだった。

この時期、あたかも中共一大の開催とあい符合するかのように、施存統はアナキズムと訣別する。その七月、かれはなお「わたしは決して根本から無政府共產主義に反對するものではない」としながらも、それがただちには實現できない現状では、「純粹のマルクス主義」にのっとった「過渡時代の辦法」が不可欠であるとして、理念だけが先行する「中國式

の「アナキズム」を批判し、さらには、「わたしは近世の無政府主義原理が現在の中國には適しないと信じる。ゆえに無政府主義には敢えて追隨しない。……わたしの信じるマルクス主義とはすなわちボルシェヴィズムである」と聲明するに至つたのである。ここには、アナキズムからボルシェヴィズムに轉じ、中共に投じた當時の急進的青年の思想的軌跡のひとつの典型を見てとることができよう。すなわち、「中國式的無政府主義」(『新青年』九卷一號、一九二一年五月)において、中國のアナキズムのなかに「放縱」「懶惰」といった前代より變わらぬ心性をみだし、それを指彈した陳獨秀とは別に、アナキズムの究極的理想を根本的には捨てることなく、否むしろその理想を實現するまさにそのことのためにこそ、その「階級力完全ニ消滅スルニ至リテ國家ハ其ノ效ヲ失フ」「無國家ノ社會」に道を開く「無產階級ノ政權掌握必要」の理論をマルクス主義のなかに見いだした施存統のごとき例は、決して少なくはなかつたはずである。(80)

その意味では、日本のマルクス主義研究、とりわけ『社會主義研究』誌上において、ソビエト・ロシアの勞農獨裁をマルクスの「ゴータ綱領批判」から肯定的に解釋していた當時の山川均が施存統にあたえた影響は相當に大きかつたにちがいない。實際かれは、同じく肺を病みながら、精力的にマルクス主義研究をすすめる山川のその種の論文を、鋭意翻譯して『民國日報』に寄稿し、さらには『社會主義研究』の紹介(83)なる一文を書いて、山川への傾倒ぶりをあらわにしている。ソビエト・ロシアに共感した施存統の様子を、當時日本に留學していたアナキスト張景は、「施君の日夜勉強に勵む精神は敬服に値するものだった。かれは『レーニン』はソ連で毎日十八、九時間仕事をして、たった五時間しか休まない。僕ら若者はそれよりもっと努力しなければならないだろう」と語つたものである。わたしの机の前には、かれが『世界革命』の四文字を記したレーニンの肖像が貼られていた(84)と回想しているが、それは施存統が山川均らの影響下にボルシェヴィズムに轉じた一九二一年後半の情景であらう。

さて、施存統の留學中の事跡に話をもどすと、一九二一年夏以降の動向で觸れなければならないのは、その秋に極東諸民族大會への人員派遣の働きかけのために密かに來日した張大雷と日本の社會主義者との接觸を斡旋したことである。

「施存統證言」によれば、「中國社會主義青年團の團員」張太雷が「露國過激派の代表」「S君」(Sneevee すなわちマリリン)からの使命と周佛海の紹介狀を帶びて、かれの下宿である三崎館に現れたのは一〇月五日だった。張太雷はかれのもとに一週間ばかり滞在したが、到着の翌日あたりに施に伴われて、かれと面識のあった堺利彦のもとを訪問し(施存統は大杉榮、山川均も知っていたが、面識がなかったので堺を紹介したという)、極東諸民族大會への人員派遣を要請したという。堺はすぐに近藤榮藏を呼んで張と施に應對したが、施存統の語學力ではとても通譯はおぼつかなかったのであろう、そのやりとりは雙方英語でおこなわれたらしい。施存統はこのほかに、張太雷がその後もう一度堺に面會して、かれらが派遣してくれる人員の數を確認し、その何れかのさいに朝鮮銀行の百圓札で千圓を派遣旅費として近藤に渡したが、そのうちの五百圓は施存統自身が朝鮮銀行で日本紙幣に兩替したこと、施存統自身も日本の社會主義文獻の翻譯原稿料として百圓をうけとったこと、また張太雷がその使命を完遂して歸國したのが一〇月一三日前後であることを詳細に證言している。

この證言は、後述するように、事實をほぼつつみ隠さず述べているものだが、張太雷の來日の經緯とその時期に關しては、張太雷の當時の事跡に不明な點も多いため、若干の補足をしておく必要がある。まずその來日の經緯についていえば、張太雷の日本への派遣は、マリリンが陳獨秀に諮らぬまま獨斷で指示したものらしい。當時、上海にいた張國燾は、張太雷の出發のあとでこれを知らされた陳獨秀がマリリンの專横をなじったため、兩者の間には感情の對立が生じ、ついには陳獨秀が周佛海と李達に命じて、施存統にあてて、張太雷には協力しないように申し傳える手紙を送るという事態にまでなったとしてその間の模様を詳述し、それを「中共中央の最初の大爭論」と呼んでいる。⁽⁸⁵⁾かれの回想によれば、密函を受け取ってそれを張太雷に見せた施存統が、幸いにも張太雷の説明に納得してくれたため、張は何とか任務を果たすことができたのだという。中國人自身による黨運営を強く求めていた當時の陳獨秀が、何かにつけコミンテルンの權威を振りかざすマリリンを快く思っていなかったことは、關係者の回想が多く指摘するところであり、かれがマリリンや、その助手兼通譯にして一部には「交際に長ずる海派の作風を有する」⁽⁸⁶⁾という評もあつた張太雷に對して、こうした舉に出

たとは十分に考えられることである。

ついで張太雷の來日、離日について、施存統はそれをそれぞれ「一〇月五日」「一〇月一三日頃」と證言しているが、官憲側の文書にはその來日を「八月下旬」「一〇月二日」⁽⁸⁷⁾とするものもあり、にわかには確定しがたい。また、その離日に關しても、「八月下旬」「一二月一二、三日頃」⁽⁸⁸⁾とする説もあり、やはり若干の検討を加えておくべきであろう。そこでまず確認しておくべきは、獨斷で張太雷を派遣したマーリンと對立した陳獨秀の動向である。陳獨秀が上海の中共中央の指導のため、教育委員長として招聘されていた廣州を離れたのは九月一〇日であり、この年上海の租界警察によって逮捕されたのは一〇月四日、釋放され自由の身になったのは一〇月二六日である。⁽⁸⁹⁾その釋放にさいし、マーリンおよび日本から歸國した張太雷が盡力したため、張派遣の一件でこじれた陳とマーリンの關係が修復されたといわれている以上、前述の張派遣の経緯から考えても、張太雷の渡日は陳が上海に着いた九月の中旬以降、またその歸國は遅くとも陳釋放の日以前でなければならぬ。これとは別に、極東諸民族大會に参加すべく日本を發った徳田球一は、「一〇月初旬」に「日本郵船の春日丸」で張太雷とともに上海へ向かったと述べている。⁽⁹¹⁾徳田の回想する船名が正しいとすれば、春日丸の出航記録に照らして張の離日の日時も確定できることになる。その前後の日本の新聞にみえる同船の運航としては、横濱發九月二五日、同一〇月一二日、同一〇月三〇日があるが、前述の上海の事情を考えれば、一〇月一二日横濱發、一四日神戸發の便がもっとも妥當ということになる。そしてその日附は奇しくも施存統の證言と一致する。徳田が張太雷と乗船したのがまちがいになく「春日丸」であったと言い切ることにはできないが、當時の上海の状況からしても、張太雷の來日と離日はほぼ施存統の證言する日時であったと結論することができるだろう。

このように、施存統は「日本小組」あるいは中共黨員として、日本の社會主義者と中國、あるいはコミンテルンとの連絡を仲介するかわり、精力的に日本の社會主義文獻を中國に紹介し、創立期中共におけるマルクス主義研究の進展に貢献していたが、張太雷の來日から三箇月もせぬうちに、かれの留學生活は突如終わりを告げることになる。かれを待つて

いたのは、「赤化宣傳運動資金」の授受に關與した容疑による逮捕と、「本人ノ行動ハ我治安ヲ紊ルコト甚大ニシテ此儘本邦ニ滞在セシムル時ハ益々我社會主義者トノ連結ヲ鞏固ニシ現代社會組織ヲ變壞スルノ虞アル」⁽⁹²⁾ことを理由とする國外退去處分であつた。

施存統逮捕の發端となつたのは、文書による反軍宣傳を容疑とする近藤榮藏の檢舉（一九二二年一月二五日）に始まる。いわゆる「曉民共產黨事件」と、それと同時に發覺した「グレイ事件」（日本の共產主義運動の資金とおぼしき約七千圓を持って上海から來日したビー・グレイ〔B. Gray〕が二月二四日に檢舉された事件）であつたと思われる。警視廳は「グレイ事件」に鑑みて要注意外國人の一掃を検討し、同時にグレイと日本人との間に介在する外國人の捜査のなかで、施存統にゆきあつたと傳えられている。⁽⁹³⁾そしてそれと並行して、「曉民共產黨事件」の取り調べが進んでいけば、さきに近藤にたいする張太雷からの資金提供を斡旋した施存統に捜査の手が伸びるのは時間の問題だつた。近藤の檢舉からひと月もせぬ一二月二〇日、はたして施存統は逮捕され、日比谷署に拘引される。⁽⁹⁴⁾

身柄を拘束されたかれは、早速に警視廳外事課の厳しい取り調べを受けた。そのさいの供述の内容は詳しくはわからないが、警視總監より内務大臣にその國外退去處分が申請された一二月二三日に、かれが東京地方裁判所の「曉民共產黨事件」豫審廷で證言した内容はその供述と重なるものと考えられる。その證言の過半を占める張太雷渡來に關する敘述はすでに紹介しているので、以下ではそれ以外の事項を検討しておくことにする。

かれは張太雷來日の一件に關する證言に續いて、「上海のライフ」の「ゴーマンを知つてゐるか」という判事の質問に「知りませぬ」と答えているが、これは近藤が同じく豫審廷で、その一月に「上海ライフのゴーマン」に曉民共產黨の運動報告を書面で送つた、と述べたことを判事がさらに追及したものである。またかれは、「黃界民〔黃介民〕を知つてゐるか」という質問にも、「知りませぬ」⁽⁹⁸⁾と答えているが、これも近藤が同年五月に上海に渡つたさいに、かれが黃介民ら「上海共產黨」と接觸したと述べたことを追及したものであろう。施存統は接觸のあつた日本の社會主義者（界利彦、高

津正道、伊井敬〔近藤榮藏〕、高瀬清、宮崎龍介〕と、陳獨秀らの共產黨に關係を有する中國人社會主義者の名前のほうはスラ
スラと答えており、「ゴーマン」「黃介民」に關してのみ事實を隱蔽したとは考えにくい。實際かれは、陳獨秀らの共產
黨以外に、上海にあつて日本社會主義者と接觸を試み、それをうけて當時の日本の警察側が中國の「共產黨」と目したそ
れら多様な共產主義組織については聞知していなかったのだろう。⁽⁹⁹⁾

他方、かれは陳獨秀らを中心とする共產黨組織については、相當に詳しい證言をしている。その證言によれば、かれが
名を擧げる中國の社會主義者は「陳犯秀〔陳獨秀〕、戴天仇〔戴季陶〕、李達、張國燾、秀松〔俞秀松〕、邵中子〔邵力子〕、陳
望道、王仲甫、吳明〔陳公培〕、沈玄廬、黃璧魂、李□〔一字判讀不能〕、周佛海、謝晉青、李漢俊、楊明富〔楊明齋〕、李□明
〔一字判讀不能〕、哲民〔費哲民〕、李虛丹」らであつた。いうまでもなく、それはさきに一大を開いた中共の中核メンバ―
を中心にして、さらにはいわゆる「上海小組」に關與したことのある戴季陶や沈玄廬らと、アナキストとして知られた
黃碧魂⁽¹⁰⁰⁾、費哲民⁽¹⁰¹⁾、そして留日時期に知り合つた謝晉青を加えたものである(王仲甫、李虛丹については不明)。これにより、
施存統にあつては、いわゆる中共建黨史の定説が傳える黨員以外の「アナキスト」も、創立期中共と深い關係を有すると
考えられていたことが知れる。續いてかれは、上海における社會主義者團體としては、「陳犯秀〔陳獨秀〕が牛耳を執」
る「共產黨」、「李達が主として其の事務を執つて居る」「社會主義青年團」、「委員制度」のもと「李達、王仲甫が委員
で」ある「社會主義大學校」の三組織を擧げている。「社會主義大學校」とは、一九二〇年九月に設立された「外國語學
社」のことを指していると考えられるが、事實その三組織こそ創立期中共の主要な活動據點であつたことは、かれの證言
の通りである。

このようにかれは、若干の事柄(自身の日本到着を一九二〇年七月一日と證言)を除けば、極めて正確な證言をしており、
「十九歳頃から「社會主義を——引用者註 研究」してきた自らの思想的立場に關しても、「元はアナキストであつたが今
はコミュニニストであります即ちマルクス派に屬してゐます」と明言してはばからない。その證言は、アナキズムから

最終的にマルクス主義の中に自らを定位させるに至る轉換をもたらした一年半の日本留學にたいする、かれの總括の言葉でもあった。

一二月二七日、拘留中のかれに内務大臣より國外退去命令が下され、⁽¹⁰³⁾これをうけて翌日の新聞各紙は施存統の逮捕と國外退去處分を、かれの寫眞入りで大きく報じた。中國においても、小さい記事ながら、『晨報』『申報』は施存統逮捕の報を傳えたが、⁽¹⁰⁴⁾かれが頻繁に寄稿した『民國日報』は、「赤化宣傳費を取次いだ」とされる施存統と同紙との關係を指摘されるのをはばかったためであらうか、かれの逮捕、國外退去處分については一切觸れていない。また、かれがもともと頼りにしたはずの宮崎龍介は、當時、かの「白蓮事件」の渦中にあつて、みずからも報道陣に追い回されており、とてもかれのために奔走できるような状況にはなかつた。かれに代わつて警察側の事情聴取をうけたその父滔天は次のように語っている。「彼渡來ノ後本邦ノ社會主義者界利彦、大杉榮等ヲ訪問シタル旨聞知セルヨリ前後三回迄本邦ノ社會主義者ハ賣文賣名ノ徒ニシテ眞ノ社會主義者ニ非ズ彼ト交際ヲ續クルハ將來ノ爲メニアラズトテ懇々訓戒シタルニ當時本人ハ今後ハ絶對ニ堺等ト交際ヲ絶ツ旨言明セルニ因リ自分モ之ヲ信シ居リタリ兎ニ角官憲ニ在リテハ相當實證ヲ擧ゲ追放處分ニ附セラレシ事ナラン」⁽¹⁰⁵⁾。だが、滔天は續いてこうもいう。「鄰國支那ノ一青年ヲ再ビ入國セシメザルガ如キハ餘リニ偏狹ノ處分ナラズヤ余ガ爲政者ナランニハ決シテ斯ク處置セザルベシ」。それは中國革命の支援者たるに恥じない滔天の氣骨の言であり、同時にそれは、「赤化運動」への警戒が叫ばれていた當時において、かれがいい得る精一杯のところであつただろう。

一方、施存統と交際のあつた中國人留學生の對應は、「新聞紙上ニ掲載セラレタル如ク社會主義ヲ宣傳シ本邦社會主義者ト交通シテ日本ノ治安ヲ害スルガ如クンバ追放處分ニ附セラル、モ亦止ムヲ得ザルヘシ」⁽¹⁰⁶⁾という趣旨のことを語つた田漢をはじめとして、表面上はおおむね冷淡なものであつた。かくて、慌ただしく歸國準備をすませた施存統は、一二月二八日に三崎館で同宿の中國人學友二十名ほどと「約十分閒茶菓ヲ共ニシ」⁽¹⁰⁷⁾たのち、その夕刻に二、三の友人に付き添われ

て横濱へむかい、神奈川縣警の刑事に護送されて、「ありぞな丸」の三等雜居船室にはいる。⁽¹⁰⁸⁾新聞の傳えるところでは、詰め襟の制服姿のかれは時々船窓より陸地を眺め、淋しさを漂わせていたといふ。⁽¹⁰⁹⁾かれと護送の警視廳警官二名を乗せた同船の解纜は翌二九日の午前八時半。⁽¹¹⁰⁾途中神戸、門司を経由した「ありぞな丸」が上海に到着したのは、年も改まった一九二二年一月七日のことであつた。⁽¹¹¹⁾

おわりに

中共創立期における中國のマルクス主義受容は、同時代の日本の社會主義研究の影響を多大に受けたものであつた。⁽¹¹²⁾中國におけるマルクス主義研究の先達として知られる李漢俊、李達、李大釗、陳望道、戴季陶らが揃つて日本留學の經驗を持ち、主に日本語文獻によつてマルクス主義を理解していたことは、それを端的に物語っている。いうまでもなく、施存統のマルクス主義研究もその系譜に連なるものであつた。

かれを「アナキスト」から「コンミニunist」に變えた日本留學において、日本のマルクス主義研究がかれに與えた影響のうち、その最も大きなものの一つは、山川均においてとりわけ顯著な、マルクス「ゴータ綱領批判」の解釋の上にたつ勞農獨裁肯定の理論であつたといつてよい。そして、それは同時に、當時の日本の社會主義研究がかれを通じて、中國社會主義に與えたマルクス主義傳播史上の大きな寄與でもあつた。山川をして「ボル」に轉換せしめた「ゴータ綱領批判」の理論は、施存統を通じて中國にも同様の變化を促したのである。時あたかも、中國にあつては社會革命における「專制」の是非をめぐる論戰（いわゆる無政府主義論戰）が幕を上げており、その意味においても、「ゴータ綱領批判」の持つ意味を、山川によりながら先驅的に中國に紹介した施存統の役割は大きかつた。⁽¹¹³⁾それはかれ自身の轉位をもたらしただけでなく、中國の社會主義運動が、ボルシェヴィズムにのつた「共產黨」に脱皮するための、重要な理論的根據となつたからである。主に無政府主義論戰の關連論文を收録し、初期中共黨員の必讀文獻となつた『社會主義討論集』

（新青年社、一九二二年）において、施存統の論文数が陳獨秀に次ぐ五篇（いずれも留學中に執筆したもの）に達していることは、かれの理論面での貢献のほどを物語っている。

また、日本の共產主義運動においても、施存統の位置と役割は、「日本共產黨暫定執行委員會」や「曉民共產黨」と中共、ひいてはコミンテルンとを結びつけるパイプとして、相當に重要なものであった。とりわけ、日本の共產主義運動とコミンテルンの關係を一舉に近づける契機となった「極東諸民族大會」への日本人共產主義者の参加に、張太雷とともにかれが介在したことは、「日本全志ト連絡」するという「日本小組」の使命を、かれが確かに果たしたことを示している。すなわち、かれはこの時期の日中間に存在した社會主義思想の連環と、共產主義運動の連携を一身に體現する存在として、日本および中國の共產主義運動史に逸することのできない足跡を残したのである。

浙江の一農村から杭州へ、さらに北京、上海、東京、そして再び上海へと若き日の施存統がたどった道程は、同時に、儒教の徒から反儒教の徒へ、そしてアナキズム、工讀互助團運動からマルクス主義、ボルシェヴィズムへと新思想、あるいは中國變革の方策をもとめて突き進んだ五四青年の道程でもあった。そしてマルクス主義を終生の指針として上海にもどったとき、かれは若き日の、文字どおりの彷徨にピリオドをうつことになる。中國でかれを待っていたものは、その後のかれにさらなる彷徨を迫ることになる中國革命の苦難の道りであった。歸國後の社會主義青年團でのめざましい活躍や、そのさらなる彷徨をもたらした一九二七年の「離黨」をはじめとして、かれの生涯に關して検討さるべき問題はなお少なくない。次稿での課題としたい。

註

凡例

本稿註に引用する資料に關し、以下のものはそれぞれ次のように略記する。

1

外務省外交史料館所蔵の諸資料

・「過激派其他危險主義者取締關係雜件 本邦人之部 主義者名簿」（分類項目 四—三—二—一—一）↓（A）

- ・「過激派其他危險主義者取締關係雜件 外國人之部 支那國人」(同 四—三—二—一—二—一) ↓ (B)
 - ・「過激派其他危險主義者取締關係雜件 社會運動狀況 支那」(同 四—三—二—一—四—五) ↓ (C)
 - ・「要視察外國人ノ舉動關係雜纂 支那國人之部」(同 四—三—二—二—五) ↓ (D)
 - ・「外國人退去處分關係雜件 支那國人」(同 四—二—一—二—一八) ↓ (E)
 - ・「在本邦清國留學生關係雜纂 雜之部」(同 三—一—〇—五—三—一六) ↓ (F)
- 2 「曉民共產黨事件豫審廷における證人施存統の證言(抄本)」(東京地方裁判所、一九二二年二月三日 寫眞版 松尾尊兌氏所藏) ↓ 「施存統證言」(なお、現存するこの證言記録は裁判所側が作成したものを、被告辯護人側が筆寫したものと考えられる。)

- (1) 「退去受命者支那人施存統ニ關スル件 高祕第九三七號 大正十一年一月六日」(E)。
- (2) 施存統は一九二七年に聲明を發表して「悲痛中の自白」『中央副刊』第一五七號、一九二七年八月三〇日、共產黨からの離黨を宣言した經歷を持つため、文革時期に迫害を受けた。一九八二年六月一七日の『人民日報』に掲載された胡厥文等「民主革命時期的英勇戰士施復亮同志」がその實質上の名譽回復となり、それ以後、かれに對する研究も行われるようになった。これより先、日本においては、平野正「一中國人日

本留學生の軌跡—施復亮の場合—」(『Furukawa UNESCO』第一四號、一九七九年)が發表されているが、日本留學中のかれの事跡については、人名辭典風の紹介の域を出ておらず、疎漏が多い。中國における施存統の略傳としては以下のものがある。王水湘等「施存統」『中共黨史人物傳』第四四卷、陝西人民出版社、一九九〇年、齊衛平「施復亮傳」(『中國各民主黨派史人物傳』第一卷(華夏出版社、一九九一年)。また、施存統の初期思想、およびかれと共產黨の創立の關係を論じたものとしては、陶水木「施存統對馬克思主義早期傳播的貢獻」(『杭州師範學院學報』一九九一年四期)、陳紹康「論早期團的領導人俞秀松和施存統」(『上海革命史資料與研究』第一輯、開明出版社、一九九二年)、梁妙珍「施存統與中國共產黨的創建」(同上)等がある。だが、これら諸研究は留日時期の事跡についてまったく施存統の回想に依據しており、事實の解明において殘されている課題はなお多いといわざるを得ない。

(3) それら回想錄の大部分は、中國社會科學院現代史研究室、中國革命博物館黨史研究室選編『「一大」前後』(二)(第二版、人民出版社、一九八五年、以下「一大前後」と略記する)に收録されている。

(4) 施復亮「中國共產黨成立時期的幾個問題」(『黨史資料叢刊』一九八〇年第一輯)、同「中國共產黨成立時期的幾個問題」(『一大前後』)、同「中國社會主義青年團成立前後的一些情況」(『一大前後』)より摘錄。

(5) 存統「回頭看二十二年來的我」(『民國日報』「覺悟」一九

二〇年九月二〇（二四日）。以下、特に断らぬ限り、日本留學に至るまでの事情は同文章による。

- (6) 「省教育廳より省長あての査察報告」（『浙江學潮底動機（？）』、『星期評論』第三九號、一九二〇年二月二九日 所引）。
- (7) 「非孝」事件の概要については、齊衛平「施存統著『非孝』引起一場軒然大波」（『民國春秋』一九九〇年一期）参照。
- (8) 「浙江一師風潮」の顛末については、坂井洋史「五四時期の學生運動斷面『陳昌標日記』に見る一師風潮」（『言語文化』第二六號、一九八九年二月）が、當時の浙江一師學生陳昌標の日記をもとに詳細に論じている。
- (9) 「國務院致各省密電稿 一九一九年二月二日」（張允侯等編『五四時期的社團』（三）、生活・讀書・新知三聯書店、一九七九年、一四三頁）。
- (10) 「愈秀松烈士日記」（前掲『上海革命史資料與研究』第一輯 所收）一九二〇年六月二七日條にいう。「我從今年一月一日脫離杭州第一師範學校以來……」。愈秀松の日記に關しては、註(32)も参照のこと。
- (11) 獨秀「浙江新潮——少年」（『新青年』七卷二號、一九二〇年一月）。
- (12) 「愈秀松の家人あて書簡 一九二〇年三月四日」（『紅旗飄飄』第三一集、中國青年出版社、一九九〇年、二三三頁）。
- (13) 施存統は「回頭看二十二年來的我」の中で、戀愛問題の發端となった彼女の名を「羣先」と記しているが、それは傳彬然の語る「國會議員易變龍（易宗變？）の娘「群仙」（傳彬然「五四前後」、中國社會科學院近代史研究所編『五四運動

回憶錄」下、中國社會科學出版社、一九七九年、七五一頁）のことであらう。

- (14) 存統「『工讀互助團』底實驗和教訓」（『星期評論』第四八號、一九二〇年五月一日）。
- (15) 「愈秀松の駱致襄あて書簡 一九二〇年三月」（前掲『紅旗飄飄』第三一集、二三五頁）。
- (16) 「愈秀松の駱致襄あて書簡 一九二〇年四月四日」（同前、二三六—二三七頁）。
- (17) 玄廬「學生與文化運動」（『星期評論』第三九號、一九二〇年二月二九日）。なお、杭州で印刷できなくなった『浙江新潮』第三號は、沈玄廬、戴季陶の援助によって星期評論社が印刷をひきうけたという（倪維熊『《浙江新潮》的回憶』（前掲『五四運動回憶錄』下、七三八—七三九頁））。
- (18) 沈仲九の經歷については不明な點が多いが、坂井洋史「山鹿泰治と中國——『たそがれ日記』に見る日中アナキストの交流」（『猫頭鷹』第二號、一九八三年二月）に觸れるところがある。
- (19) 當時の星期評論社同人の生活は、前掲「愈秀松烈士日記」がいきいきと傳えている。
- (20) 前掲「愈秀松の駱致襄あて書簡 一九二〇年四月四日」。
- (21) 季陶「工讀互助團與資本家的生產制」（『新青年』七卷五號、一九二〇年四月）。
- (22) 前掲「愈秀松の駱致襄あて書簡 一九二〇年四月四日」。
- (23) 前掲「愈秀松の駱致襄あて書簡 一九二〇年四月四日」、および前掲「愈秀松烈士日記」一九二〇年六月二七日條。

- (24) 前掲存統『工讀互助團』底實驗和教訓。
- (25) 「施存統證言」。
- (26) 虞崇勝「南陳北李、相約建黨」の時間和地點（『江漢論壇』一九八六年五期）、莊有爲「試述南陳北李、相約建黨」（『中共黨史論叢』上海交通大學出版社、一九八八年）参照。
- (27) 任武雄「對社會主義者同盟」的探索（『黨史研究資料』一九九三年六期）、胡慶雲「何謂社會主義者同盟」（『黨史研究資料』一九九三年一〇期）参照。
- (28) ヴォイチンスキーの上海到着の日は確定しがたいが、陳公培の回想（回憶黨的發起組和赴法勤工儉學等情況）（『一大前後』五六四頁）に、「わたしはこの年（一九二〇年）のメーデー以前に『星期評論』社でかれ（ヴォイチンスキー）に會った」という記述が見えるので、ここでは一應「四月末」としておく。
- (29) それぞれ、『一大前後』所收の陳望道「回憶黨成立時期の一些情況」、邵力子「黨成立前後の一些情況」、および「李達自傳」（『黨史研究資料』一九八〇年八期）。
- (30) 例えば、任武雄「一九二〇年陳獨秀建立的社會主義研究社——兼談上海馬克思主義研究會」的問題（『黨史研究資料』一九九三年四期）。
- (31) 主に各種回想録によった「上海小組」の考證には、本庄比佐子「上海共產主義グループの成立をめぐる」（『論集近代中國研究』山川出版社、一九八一年）がある。
- (32) 日記の概要とその發見の経緯に關しては、安志潔、俞壽威「珍藏七十一載 重現在黨的紀念日——俞秀松烈士部分日記被發現」（『上海黨史』一九九一年七期）参照。
- (33) 前掲「俞秀松烈士日記」七月一日條。「經過前回我們所組織底社會共產黨以後、對於安那其主義和波爾雪佛克主義、都覺得茫無頭緒、從前信安那其主義、的確是盲從的、……」。
- (34) 前掲陳公培「回憶黨的發起組和赴法勤工儉學等情況」。
- (35) 前掲存統「回頭看二十二年來的我」、および前掲施復亮「中國共產黨成立時期的幾個問題」。
- (36) 前掲「俞秀松烈士日記」六月一日條。
- (37) 『民國日報』「覺悟」一九二〇年六月一九日には、六月一日夜の施存統壯行宴で作られたと見られる費哲民、孫祖基の送別の詩二首が掲載されている。
- (38) 『民國日報』「覺悟」一九二〇年六月二六日には、戴季陶が六月一七日に湖州に發つ旨の記載がある。
- (39) 「楊之華的回憶」（『一大前後』二六頁）、張國燾『我的回憶』第一冊（明報月刊出版社、一九七一年）一〇三頁。
- (40) 陳望道が翻譯した『共產黨宣言』については、俞秀松日記に記述がある。それによれば、俞秀松は一九二〇年六月二七日夜に陳望道と會い、陳が郷里で翻譯した『共產黨宣言』の譯稿を手交され、翌日にそれを陳獨秀に届けている（前掲「俞秀松烈士日記」六月二七日、二八日條）。
- (41) 李達が日本留學を終え、中國へ向け歸國したのは一九二〇年八月一九日である（『留日學生總會暨立會文牘主任李達ノ行動 外秘乙第三二五號 大正九年九月十日』（F））。
- (42) 周佛海「扶桑爰影溯當年」（『陳公博・周佛海回憶錄合編』春秋出版社、一九六七年、一三九—一四〇頁）。

- (43) 「愈秀松烈士日記」七月一日、一二日條には沈仲九、夏
 丐尊らが日本留學の考えを抱いていたこと、また愈自身も沈
 玄廬に日本留學を勧められていたことが記されている。
- (44) 存統「青年應自己増加工作」(『民國日報』「覺悟」一九二
 〇年八月二六日)。
- (45) 戴天仇「三民主義」(『解放』二卷二號、一九二〇年二月)。
 なお、この文章は、戴季陶が一九二〇年一月七日附で堺利彦
 に宛てた書簡である。
- (46) 季陶「到湖州後的感想」(『建設』二卷六號、一九二〇年八
 月)。
- (47) 宮崎龍介「新裝の民國から」(『解放』一卷七號、一九一九
 年一二月)。
- (48) 前掲「愈秀松烈士日記」六月一七日、一八日、一九日條。
- (49) 「宮崎龍介より伊藤燐子あて書簡 一九二〇年六月二六
 日」(宮崎智雄氏所藏)。
- (50) 「新人記會事」(『先驅』第三號、一九二〇年四月)。
- (51) 「宮崎龍介より伊藤燐子あて書簡 一九二〇年五月九日」
 「同 五月一三日」「同 五月一九日」「同 五月二七日」
 (宮崎智雄氏所藏)。なお、北京大學教授、學生訪日團の活
 動については、松尾尊兌「民本主義者と五・四運動」(松尾
 『大正デモクラシーの研究』青木書店、一九六六年 所收)、
 同「五四期における吉野作造と李大釗」(吉野作造『現代憲
 政の運用』「みすずリプリント」一五 附録、みすず書房、一九
 八八年)、王曉秋「李大釗與五四時期的中日文化交流」(『李
 大釗研究論文集』北京大學出版社、一九八九年 所收) 参照。
- (52) H・スミス著、松尾尊兌、森史子譯『新人會の研究——日
 本學生運動の源流』(東京大學出版會、一九七八年) 五五頁。
- (53) 「無政府主義宣傳雜誌「自由」ノ通信者ニ關スル件 外秘
 乙第一九號 大正十年一月十日」(B)。
- (54) 前掲存統「青年應自己増加工作」。
- (55) 存統「對於抄近路求學的朋友底忠告」(『民國日報』「覺悟」
 一九二一年一月二七日)。
- (56) 「施存統證言」。
- (57) 前掲存統「青年應自己増加工作」、同「對於抄近路求學的
 朋友底忠告」。
- (58) 「支那人施存統追放處分ニ關スル本邦人ノ感想 外秘乙第
 一六二二號 大正十年十二月二十九日」(E)。
- (59) 前掲存統「對於抄近路求學的朋友底忠告」。
- (60) 存統「評戴季陶先生的中國革命觀」(『中國青年』第九一
 九二期、一九二五年九月)。
- (61) 前掲存統「青年應自己増加工作」。
- (62) 「無政府主義宣傳雜誌「自由」ノ通信者ニ關スル件 外秘
 乙第一九號 大正十年一月十日」(B)。
- (63) 「「アナーキズム」宣傳文書ノ件 外秘乙第五二號 大正
 十年一月十五日」(B)。なおこの報告は、「昨年六月頃宮崎
 滔天ナルモノ本邦ニ同伴シタルモノノ趣ナリ」と述べている
 が、同時期には宮崎滔天、宮崎龍介ともに訪中していない。
- (64) 存統「改革底要件」(『民國日報』「覺悟」一九二一年一月
 一〇日)。
- (65) 「要注意支那人施存統ノ行動 外秘乙第五二三號 大正十

年四月二十三日」(B)。

(66) 「最近ニ於ケル特別要視察人ノ狀況 大正十一年一月調」

(松尾尊允編『續・現代史資料 2 社會主義沿革』2、み
ず書房、一九八六年、一〇五〜一〇六頁)、近藤榮藏『コ
ムミンテルンの密使』(文化評論社、一九四九年)一〇六〜
一二四、一二七〜一二三頁。

(67) 前掲「最近ニ於ケル特別要視察人ノ狀況 大正十一年一月
調」、および片山政治編『日本共產黨史(戦前)』(公安調査
廳、一九六二年五月、現代史研究會復刻版、一九六二年一
月)一八〜一九頁、前掲近藤榮藏『コムミンテルンの密使』
一二八〜一二三〇頁。

(68) 楊奎松「有關中國早期共產主義組織的一些情況」(『黨史研
究資料』一九九〇年四期)、李丹陽「朝鮮人シバ克京春々來
華組黨述論」(『近代史研究』一九九二年四期)。

(69) 徐大庸著、金進譯「朝鮮共產主義運動史 一九一八〜一九
四八」(コリア評論社、一九七〇年)一六〜二二頁、および
水野直樹「コムミンテルンと朝鮮——各大會の朝鮮代表の検討
を中心に——」(『朝鮮民族運動史研究』第一號、一九八四
年)參照。

(70) 大杉榮「日本脱出記」(『大杉榮全集』第二三卷、現代思潮
社、一九六五年、二四〜二八頁)、前掲李丹陽「朝鮮人シバ
克京春々來華組黨述論」。

(71) 「要注意支那人ノ件 外秘乙第五六〇號 大正十年四月二
十九日」(B)。

(72) 彭湃、林孔昭が、堺利彦らの結成した「コスモ俱樂部」に

關係していたことは官憲側の報告に見える(それぞれ、「コ
スモ」俱樂部員會合豫報 外秘乙第七八〇號 大正九年十二
月二十三日)、「支那人「コスモ」俱樂部會員募集ニ關スル件
外秘乙第四四七號 大正十一年十一月二十八日」(D)。

(73) 「要注意支那人「施存統」ノ行動 外秘乙第七二號 大
正十年五月二十五日」(B)。

(74) 「要注意支那人ノ行動 外秘乙第九〇七號 大正十年六月
十八日」(B)。

(75) 「支那人施存統追放處分ニ關スル本邦人ノ感想 外秘乙第
一六二二號 大正十年十二月二十九日」(E)。

(76) 「要注意支那人ノ行動 外秘乙第九〇七號 大正十年六月
十八日」(B)。

(77) 「オランダ駐上海代理總領事より蘭領インド總督あて書簡
一九二一年七月一日」(李玉貞主編『馬林與第一次國共
合作』光明日報出版社、一九八九年、一三〜一四頁)。

(78) 「中國共產黨第一次代表大會」(中央檔案館編『中國共產
黨第一次代表大會檔案資料』人民出版社、一九八二年)。

(79) 「在上海支那共產黨ノ行動 外秘乙第九九五號 大正十年
六月二十九日」(C)。

(80) 光亮「一封答覆『中國式的無政府主義』者的信」(『民國
日報』「覺悟」一九二一年七月一五日)。

(81) 光亮「再與太朴論主義底選擇」(『民國日報』「覺悟」一九
二一年七月三一日)。

(82) 「施存統の太朴あて書簡」(「要注意支那人「施存統」ノ行
動 外秘乙第九三〇號 大正十年六月二十二日」(B)所收)。

なおこの書簡は邵力子に『民國日報』紙上への掲載を依頼したものだ、日本の警察側によって差し押さえられたよう、掲載にはいたっていない。

- (83) C T「介紹『社會主義研究』」(『民國日報』「覺悟」一九二二年九月二七日)。

- (84) 張景「安那其主義在中國の傳播活動斷片」(『文史資料選輯』「全國」第九〇輯、文史資料出版社、一九八三年)。

- (85) 前掲張國燾『我的回憶』第一冊、一五七—一六一頁。

- (86) 同前、一三五頁。「海派」はもと京劇の上海派より派生した語で、ここでは輕佻浮薄というニュアンスを伴っている。

- (87) それぞれ、前掲「最近ニ於ケル特別要視察人ノ狀況 大正十一年一月調」、「堺利彦等豫審終結意見書」(前掲松尾編『續・現代史資料』2 社會主義沿革』2、四九四頁)。

- (88) それぞれ、前掲張國燾『我的回憶』第一冊、一五八頁、前掲片山政治編『日本共產黨史(戰前)』二七頁。

- (89) 陳紹康「黨的々一大々 後陳獨秀回滬時間考」(『黨史研究資料』一九八二年一期)、村田雄二郎「陳獨秀在廣州(一九二〇—二一年)」(『中國研究月報』四三卷六號、一九八九年六月)、『民國日報』一九二二年一〇月六、二〇、二七日。

- (90) 「包惠僧回憶錄」(人民出版社、一九八三年) 四二〇頁。

- (91) 德田球一「わが思い出」(『德田球一全集』第五卷、五月書房、一九八六年、一三八頁)。

- (92) 「支那人追放處分ニ關スル件 内務省秘第二二六號 大正十年十二月二十七日」(E)。

- (93) 『東京朝日新聞』一九二二年一二月七日、『讀賣新聞』一

九二二年一二月二八日。

- (94) 『讀賣新聞』一九二二年一二月二八日。

- (95) その供述の要は、「支那留學生ニ對シ退去命令方申請ノ件 外祕丙第八〇四號 大正十年十二月二十三日」(E)等に見えるが、ほぼ「施存統證言」と同趣旨である。

- (96) 上海の露字日刊紙「上海ライフ」(Shanghai Life) のロシア人ゴーマン(Gorman)はバーリンの支援者であった Tony Saich, *The Origins of the First United Front in China: The Role of Snezhnet (Alias Maring)*, Vol. I, Leiden, 1991, p.248)。

- (97)(98) 前掲片山政治編『日本共產黨史(戰前)』一三三、一八頁。

- (99) 「特別要視察人狀勢調 大正十年度」(前掲松尾編『續・現代史資料』2 社會主義沿革』2、六二頁)には、「上海共產黨ハ共產主義者ノ集團ニシテ黃界民張平如(本名ハ黃定保)牛耳ヲ執リ黨員六、七十名アリ」とある。

- (100) 黃碧魂(別名黃璧魂)は一九二二年一月の極東諸民族大會に中華女界聯合會の代表として參加した女性として知られている(楊奎松「遠東各國共產黨及民族革命團體代表大會の中國代表問題」『近代史研究』一九九四年二期)。

- (101) 費哲民はその遺稿「參加革命的回憶(一)」(『費民聲整理、未刊稿』)のなかで、一九二〇年に『民國日報』社で施存統と知り合ったとのべている。

- (102) 謝曾青は、一九二〇年前後の『民國日報』「覺悟」に、東京からたびたび「日本通訊」を寄稿していた「東方書報社」

の成員として知られている。留日時期の施存統とも交流があったが、一九二一年八月末に歸國している（「要注意支那人謝晉青ノ行動 外秘乙第六四三號 大正十年五月十四日」）「要注意支那人ノ行動 外秘乙第九〇七號 大正十年六月十八日」（B）、および警保局『在留外國人概況 大正十年十二月』（A）五〇頁。

(103) 「内務省訓令第九九八號 大正十年十二月二十七日」(E)。

(104) 『晨報』一九二一年二月三十一日、『申報』一九二二年一月四日。なお、『申報』の記事によれば、施存統は「於前日到滬」とあるが、日本の官憲側資料に見るように、當時まだ上海に向かう途中にあった。

(105) 「支那人施存統追放處分ニ關スル本邦人ノ感想 外秘乙第一六二一號 大正十年十二月二十九日」(E)。

(106) (107) 「支那人施存統追放處分ニ對スル在留支那人ノ感想 外秘乙第一六一九號 大正十年十二月二十八日」(E)。

(108) (109) 『東京朝日新聞』一九二一年二月三〇日。

(110) 「退去受命者支那人施存統出發ノ件 外秘收第四七九二號

大正十年十二月二十九日」(E)。

(111) 「大阪商船配船記錄」(大阪商船三井船舶株式會社所藏)。

(112) 拙稿「マルクス主義の傳播と中國共產黨の結成」(狹間直樹編『中國國民革命の研究』京都大學人文科學研究所、一九九二年) 參照。

(113) マルクス「ゴータ綱領批判」の中國における最初の全譯は、熊得山譯「哥達綱領批評」(『今日』一卷四號、一九二二年五月)であるが、施存統は「馬克思底共產主義」(『新青年』九卷四號、一九二一年八月)で、部分的ながら、「革命過渡期」の「無產階級獨裁」の理論をマルクスの言として先驅的に紹介していた。なお、かれはその中で、「これは唯物史觀說の當然の結論であり、應用である」という山川均の「ゴータ綱領批判」に對する解釋を附記している。

〔附記〕 本稿の文獻資料収集にさいし、資料の敎示、提供をいただいた小野信爾、松尾尊兌、宮崎智雄の諸先生に深甚の謝意をあらわしたい。

distinctive characteristic of the latter part of the Southern and Northern Dynasties period. This practice of official appointment based on merit was also a distinctive characteristic of the Zhongshusheng 中書省, or bureau of the imperial secretariat, under the Northern Qi regime.

THE EARLY ACTIVITIES OF SHI CUNTONG 施存統 IN THE FOUNDING OF THE CHINESE COMMUNIST PARTY

ISHIKAWA Yoshihiro

Shi Cuntong (1899—1970) was a main figure in the Chinese Communist Party (CCP) in its early period. He is known not only as a leading figure among Chinese communists in Japan during the CCP's first congress days, but also from the fact that he served as the first secretary of the Chinese Socialist Youth Party, established in May, 1922.

As early as the May Fourth period, Shi took part in the Labor-learning Mutual Aid Corp in Beijing 北京工讀互助團. After the dissolution of this corp, Shi went to Shanghai to participate in the organization of communists initiated by Chen Duxiu 陳獨秀, Li Hanjun 李漢俊 and their faction. By June, 1920, the assembly of communists in Shanghai, including Shi himself, had been established under the name of "The Socialist Communist Party" 社會共產黨. Shortly thereafter, with the support of Dai Jitao 戴季陶, who had been instrumental in Shi's conversion to Marxism, Shi traveled to Tokyo for study. Acting in conjunction with the communists in Shanghai, in Japan Shi engaged in underground maneuvers for the communist movement in both China and Japan. These activities resulted in an order for Shi's deportation issued by the Japanese government at the end of 1921.

This paper investigates Shi's activities in Shanghai and Japan using newly discovered materials, including documents from the Ministry of Foreign Affairs in Japan. On the basis of these this paper brings to light additional facts concerning the founding of the CCP.

URBAN POPULAR MOVEMENTS RESULTING FROM ECONOMIC DISLOCATION IN OTTOMAN CAIRO

HASEBE Fumihiko

In this paper, I examine the nature of the popular protests caused by high priced and fiscal upheaval in Ottoman Cairo from the late seventeenth to the first half of the eighteenth century. To do this I draw on the Arabic chronicles, such as Mallawānī's *Tuḥfat al-Aḥbāb* as a source base to focus on the nature and activities of urban popular movements.

In addition to analyzing these seventeenth and eighteenth-century popular movements, I compare these with similar movements in Cairo during the Mamlūk period. From this comparison, two important matters are clarified. The first concerns the importance of Azhar's role as an intermediary between the Ottoman government and urban populations. The second concerns the emergence of petitions to the government as a new means of popular protest. Both of these developments affected the political climate of Cairo, and in them was revealed the desire of the people to directly express their discontent to the ruling regime. Although much of the nature and activities of popular protest movements in the Ottoman period were similar to those of the Mamlūk period, the Ottoman-period protests were more diversified and placed greater emphasis on the identification of a specific member of the ruling regime as a target of protest.